

理由



活動する

わたしが

はじめに



社会課題が複雑化・多様化する中で、NPOは

「目の前の困っている人々を放っておけない」、「よりよい未来をつくりたい」と、

日々活動しており、その社会的役割はますます大きくなっています。

名古屋市では、そんなNPOのことを知ってほしい、関わってみてほしい、

そして応援してほしいと思いい、NPOで活躍するさまざまな人の

「わたしが活動する理由」を、言葉にしてもらうことにしました。

わたしたちのまち名古屋で、どのような思いをもって活動されているのか、

それぞれの作品を通して知っていただけたら幸いです。

そしてぜひ、NPOの活動を応援してください。

活動への参加や、寄附というかたちで思いを託すなど、

さまざまな応援のかたちがあります。

そして、みんなでよりよい名古屋市をつくっていきけたら…と、

このフォト&エッセイ集をつくりました。

目次

- 2 認定NPO法人アイキャン
- 3 NPO法人愛知グリーンサポート
- 4 認定NPO法人
あいち骨髄バンクを支援する会
- 5 NPO法人アスクネット
- 6 NPO法人あなたの声
- 7 NPO法人イカオ・アコ
- 8 NPO法人えんむすび
- 9 おさがり交換会わらしべ
- 10 NPO法人風の会
- 11 NPO法人名古屋おやこセンター
- 12 NPO法人名古屋ベトナムネット
- 13 なごや防災ボラネット
- 14 NPO法人
嚕胞性線維症支援ネットワーク
- 15 ハーレーサンタCLUB NAGOYA
- 16 NPO法人ボラみみより情報局
- 17 NPO法人瑞穂学習支援会

なごやNPO応援事業 概要

みんなでよりよい未来をつくるために、
楽しみながら「ボランティア」や「NPO」に
ついて知り、チャリティなどを通して
NPOを応援する交流イベントです。

認定NPO法人 アイキャン

「社会はみんなの力で
できている」

「僕の仕事は物乞いなんだ」。当たり前のようにそう話す9歳の男の子。同じ年齢の子どもと比べるとひと回り体が小さい。朝起きて、「今日は何を食べよう」「どうやってお金を稼ごう」そんなことを考えながら危険が溢れる路上へと飛び出していきます。

都市化が進むフィリピンには、25万人以上の路上の子どもが存在します。その多くは、正式な出生登録がされておらず、政府の統計に表れない「見えない存在」です。学校に通えず、物乞いや物売り、時には軽犯罪などにより僅かな収入を得て、社会や家庭の福祉に守られることなく生きていかなければなりません。

路上の子どもたちとの活動は多岐に渡りますが、共通しているのは、私たちだけがどんなに頑張っても根本的な解決にはならないということです。子ども的人生は子どものもので。だから子どもたち自身が、「自分を変えたい」「僕でも人生を変えられるんじゃないか」と希望を持ち、ともに生き方を変えていく活動が必要です。子どもたちが生き方を変えるきっかけを作り、変わりたいと思ったときに路上から抜け出せるよう、周りの環境を整えていくこと、日々の活動は、こうした地道な作業の積み重ねでもあります。子どもたちの抱える課題は多く根深く、ひとつひとつ解決していくその道のりは、正直、

長く感じます。それでも、ともに活動する仲間や賛同してくださる多くの方々の支えによって、様々なことを学び、考え、頑張りながら、徐々に自尊心を高め成長していく子どもたちの姿は、希望そのものです。ある子どもが、「応援してくれる人がいるから頑張れる。応援してくれる人がいる限り、挑戦し続ける」と話してくれました。人は誰かを変えることはできませんが、熱い想いや懸命に取り組む姿勢と誰かを動かす原動力になるのだと思います。私自身、過酷な環境で生活しているんなものを背負いながらも前を向いて頑張っている子どもたちの姿を見ると、私にはもつとできることがあるんじゃないかと思わされます。統計には表れなくとも、子どもたちの存在そのものが、何物にも代えがたい、私が活動する意味であり、原動力にもなっています。

これから先の未来をつくり、切り開いていくのは、国でも環境でも他の誰かでもなく私たち自身です。変わらなければならぬのは、子どもたちだけではありません。不平等な仕組みを変えていくのも、誰もが住みやすい社会にするのも、この社会をつくってきた私たちが取るべき責任なのかもしれません。間違いなく言えることは、「社会はみんなの力でできている」ということ。「人ひとりの力は小さくても、みんなの力が集まれば、社会を変えていく大きな力になる」ということを、「ともに」証明していくため、これからも活動を続けていきます。

(西坂 幸)



NPO法人愛知グリーンサポート

「活動は喜ばれて楽しい」

NPO法人愛知グリーンサポートで庭師と樵(きこり)、とよた仙人掌会で樵ボランティアをしています。活動はとても楽しいです。

会社と特定非営利活動法人(以下NPO法人)の違いは、会社は利益を求める組織であり、NPO法人は社会問題の解決を目指す組織であるとされています。NPO法人は基本が、人のためにやっているのです。自分のしたことに、喜んで感謝されます。そこに生活(生きて活きて)している実感があります。そこから生きがいやうまれ自分に誇りが持てます。その楽しさが活動している理由だと強く思っています。

若いころ山岳部にいました。鍊成で恐怖・苦痛に耐えられるようになりませんが、孤独・孤立の寂しさは耐えられるようにはなれません。そのころ山奥で3週間人間に会わない時がありました。その孤独から、人はお金持ちになつたり出世したがるのは、家族友人や周囲の人に自分を認識してほしいためと考えるように

なりました。話し見てくれる人が必要で、世界に自分一人では何をしても意味はないと考えました。人は、家族や友人たちに感謝される喜んでもらう、それが楽しみなのだと。

定年後、豊田市で樵ボランティアに入りました。仲間は魑魅魍魎、いろんな人と会えてとても楽しい。また間伐で1本大木を倒せば、「まっくら森」の空に穴が開き、そこから陽光が入ってきます。仲間と寝転んで見上げれば、体中に1本分は環境に貢献した実感、自分が人のためになった実感が湧きあがります。ボランティア活動は、多くの楽しいことがあります。

街からも、大木を伐ってくれ、木を小さくしてくれ、剪定してくれとの声がかかり、街で、街の木々に風が流れる風流な風景を作り、みんなが楽しく生活ができるように頑張っています。われら楽しく、率先垂範、一致団結、刻苦奮闘。

(九鬼良孝)



認定NPO法人あいち骨髓バンクを支援する会

こっずい

「『骨髓バンク』をご存知ですか？」



33年前、父が白血病を発病した。白血病なんて自分とは無縁と思っていた。辛い治療が始まった。家族の負担も大きく、慌ただしい日々が続いたが、家族の懸命な看病にも関わらず残念ながら父は他界した。父の発病がきっかけで母は骨髓バンクのボランティア活動に参加し、その後、私も事務局を手伝うこととなった。多くの患者さんやご家族と接しているうちに、気が付くとボランティア活動にも参加するようになり、いつのまにかそれが生活の一部になっていた。

父の発病当時、日本にはまだ骨髓バンクはなかった。「骨髓バンクがないなら作ればいい」と患者さんやご家族、医療者、ボランティアの努力で1989年に民間の骨髓バンク「東海骨髓バンク」を設立、その後、国を動かし公的骨髓バンク「骨髓移植推進財団」(現「日本骨髓バンク」)が1991年に発足した。その過程を見て

いて、改めてボランティアのパワーを感じた。

セピア色の治療中の彼女の写真からは年月の経過を伺うことができる。「東海骨髓バンク」設立にあたり中心的メンバーだった彼女は骨髓移植後34年を経て、聖火ランナーとして笑顔で聖火を繋いだ。

素敵なパートナーと出会い、華やかなウエディングドレスに身を包まれた彼女も高校生で骨髓移植。辛い治療の先にこんな素敵な未来が、笑顔があるのは提供ドナーがいっぱいだったから。

活動を始めて25年、なぜ私は活動を続けるのかと思うことがある。

病気が分かった時、患者さんやご家族は辛い気持ちをお話しくださる。辛い治療も「絶対に元気になるんだ」という気持ちで前向きに頑張る。

しかし頑張るためには提供してくださるドナーが必要となる。一人でも多くの患者さんが移植を受けるためには、ドナー登録者を拡大し「致する確率を上げなければならぬ」。

患者さんはドナーが見つかることでやっとスタートに立つことが出来る。患者さんもご家族も笑顔になる。辛い治療も頑張

れる。患者さんとドナーさんは直接会うことができないが、2回だけお手紙の交換ができる。ある患者さんからのお手紙には「ドナーさんは私の人生を救ってくさいました、子どもたちの人生も救ってくださいました」と記されていた。

骨髓移植を終えた患者さんは移植の日を「二つ目のお誕生日」と言う。新たな「生命(いのち)」をいただいた日。

辛くて苦しい気持ちを涙しながら話して下さった患者さんがお元気になって笑っている。患者さんの笑顔を見ると、私も嬉しくなる。聖火リレーで輝いていた彼女の笑顔、ご夫婦で寄り添い幸せいっぱい笑顔。

私が活動するのは笑顔と出会えるから、たくさん笑顔と出会いたいから。

現在の骨髓バンクドナー登録者数は約53万人。移植を希望する全ての患者さんが移植の「チャンス」に出会えるには更なる登録者数の拡大が必要。多くの方に骨髓バンクを知っていただき一人でも多くの方に登録いただければと思う。

全ての患者さんやご家族の笑顔と出会えることを願ってこれからも活動を続けていきたい。
(水谷久美)



NPO法人アスクネット



「地域の大人と子どもたちが繋がることで、子どもたちが、多様な生き方、夢、目標を育むことができる社会に。」

私たちは、学校と地域を繋ぎ、大人と子どもたちとの接点をつくる『キャリア教育コーディネーター』として、子どもたちが多様な生き方、夢、目標を育むことができる環境づくりに力を入れている。具体的には、子どもたちが地域の企業、団体で学ぶ「インタビュ学習」や「インターシップ」、地域住民が職業や特技を生かして学校での講師をつとめる「社会人講座」などを、私たちが企画から各連携先との調整、運営までをサポートしている。

そして、私たちの活動テーマである『キャリア教育』とは、様々な捉え方があるが、私は、学校が地域と繋がり、多様な大人の「生き方」に触れることで、今の学びが社会と繋がっていくことを知り、自ら生きる力を育んでいくことを目的とした教育であると考えている。

子どもたちにとってインターシップは最短で2日、インタビュ学習や社会人講座は最短で1時間の体験。その中でもたった数分の出来事や経験が、その子の心にグッと刺さり、その子の人生を変え、社会を変えるきっかけになったりする。例えば、このようなエピソードがある。

「人と関わることが苦手だから接客の仕事は絶対に選ばない。」と主張していた高校1年生の男の子。インターシップで接客の仕事を経験して、本当は得意でやりがいを感じられることだと気づくことができた。

・学校を休みがちだった高校1年生の男の子。憧れの企業で実際に働く社会人から、「学校で勉強したことが、今、仕事に活かしている。」という話を聞いたことで、学校での勉強が社会に繋がる面白さに気付き、毎日学校に通うようになった。

・生活態度や成績が良くなって先生から心配されていた高校2年生の女の子。インターシップの3日間は真面目にがんばり、企業から「すごくいい子で卒業後、就職してほしいと思った。」という言葉を送った。それから、その生徒を見る先生の目が変わり、生徒の学校での態度も変わっていった。

このように、子どもたちの表情や行動が変わる瞬間に立ち会えることはこの活動の醍醐味で、何よりのやりがいである。さらに、子どもたちの変化はこのような

地域社会の変化ももたらす。

↑高校は、生徒の特性上、地域から煙たがれる側面もあった。しかしインターシップを通じて生徒が地域の事業所の方々と交流する中で、地域からのまなざしに変化が表れていった。

インターシップが終わった後に、受入事

業所から、「子どもたちが来てくれて、社内には活気が出た。」今の高校生を知ることができて勉強になった。「高校生に仕事を教えていたら、自分たちの仕事のやり方の見直しになった。」などといった言葉を聞いた。

このように、教育活動に積極的に関わっていただけの地域の方が増えることは、この活動の成果でもある。そして、地域の方の協力によって子どもたちが自ら学びに飛び出せるフィールドが増えていく。

成果がすぐには出にくい活動ではあるが、支援に携わった子どもたちから数年後に

「あの人、あの場所に出会えたから、今のこの道を選ぶことができた。」

「あの挑戦があったから、わたしもできると信じることができた。」

などの言葉ももたらせることがさらに今後の活動に火をつける。そして、「そのような言葉ももらい続けたい。より良い社会に繋げていきたい。」からこそ、私はこの活動を続けている。

(烏田 萌音)



NPO法人あなたの声



「みんなの笑顔と 想いをつないで」

ある日、目が覚めたら出張先の外国の病院だった。モレーツ社員のAさんは脳卒中から生還したが、言いたい言葉が出てこない。

Bさんは交通事故で意識不明になったが、
命をとりとめた。
ぎゅっり、を見ているのに、ナス、と言っ
てしまう。

Cさんは退院後ようやく町へ出てみたが、
まるで外国にいるようで言葉を聞き取る
のが難しい。半身不随の辛さに加え、身近
な人にも自分の気持ちを伝えられない。

失語症は、脳血管障害や頭部外傷などで
脳の言葉を司る部分が損傷されること
により引き起こされます。

私は失語症会話パートナー。
ある日の新聞で見つけた「失語症会話
パートナー養成講座」
受講して会話パートナーとなった。

失語症のサロン（友の会）に来てみた。
失語症のお仲間達がいて、言語聴覚士や
失語症会話パートナーがいる。

「お元気だった？」
みんなとお話したり、ゲームや音楽を楽
しんだり、ここはそれぞれの参加者の想い

を共有できる場所だ。

お出かけの場所はどこ？と地図を広げて
みる。スマホをあけて写真を見せてもら
う。言葉をあきらめてほしくない。少し
ずつ会話が弾み分かり合えた笑顔が嬉し
い。

失語症の方々に寄り添える失語症会話
パートナーになりたい。

ひとりで困った時は声をかけてください。
誰もが食べて寝て元気な日常を取り戻
せますように。あなたのお話があの人につ
ながり温かい気持ちになりました。おひと
り、おひとりのお話を聴いて失語症への理
解が深まりました。ここにいるみんなが前
向きになり、ここにいると、みなさんから
元気を頂きます。今日も有難うございま
した。

もつともつと失語症の方の笑顔に出会
たい、多くの人に失語症の事を知ってほ
しい。失語症の方々の社会参加のお手伝
いをしたい。それが、私達失語症会話パ
ートナーの願いです。

こんな言葉を下さった失語症者ご家族
もおられます。「ひとときの笑顔が、たく
さん集まれば笑顔がいっぱいになります。
ひとりの笑顔が、周りの人をしあわせに
します。みんなで、しあわせになりますよ
う。きつと、大丈夫です。」
(あなたの声 失語症会話パートナー)



「1本の苗木が未来につながる」

「イカオアコ」

フィリピンの現地言葉で「あなたとわたし」。

フィリピン人の「あなた」と日本人の「わたし」が、国境を越え、共に手を取り合い、マングローブの植林を行っている。

大学時代に留学したフィリピンで、陽気で明るいフィリピン人の人柄に触れた。自分の気持ちに正直で、笑顔が絶えないフィリピン人たち。

日本で人付き合いに窮屈さを感じていた私は、呼吸が楽になった。

「フィリピンと繋がっていたい」
そんな思いでイカオ・アコの活動に参加した。

現地では、住民が大人も子どもも一緒にマングローブを植える。

3歳の男の子が大切に両手で苗木を運び、苗木を植えると、一生懸命泥をかぶせる。お母さんの真似をしているだけかもしれない。

私の目には、それがとても尊く、愛しい姿に映った。

マングローブの森は「海のゆりかご」と呼ばれるほど、周りの生態系を豊かにしてくれる。

津波の防波堤にもなってくれる。現地の人々にとつて無くってはならない大切な森。

でも、彼らが森を育てるのは自分たちのためだけではない。

マングローブは地球環境を守るためにもとても重要だ。

二酸化炭素の吸収量がとても多いマングローブ。

二酸化炭素を減らすことは、地球温暖化に有効な対策。

ゲリラ豪雨、土砂災害、続く酷暑日。地球温暖化の影響が、日本に住む私たちにも身近になってきた。

気候変動のリスクは、私たちの暮らしに深刻な打撃をもたらす。

フィリピン人と私たち日本人が協働して育てるマングローブの森が、未来の子どもたちを気候変動のリスクから守ってくれるように。

私たちは今日もマングローブの森を育てる。
(二角智美、木村容子)



NPO法人えんむすび



「笑顔の花咲く」

皆さんは、「就労支援事業所」というところをご存じですか？

ここでは、さまざまな障がいをお持ちの方が、日々生懸命に働いていらっしゃいます。私たちは、ここに通う方たちの多くが、「独身」であることに気づきました。

私たちは、ここに通う皆さんに「夢」をお伺いしました。

すると、
「普通の人と同じように結婚したい。」
「自立した生活を出るようになりたい。」
「生涯共に過ごすことができるパートナーが欲しい。」

という声を、私たちは聞くことができました。

でも、必ずそのあとには、

「でも障がいがあるし…。」
「障がいがあつては相手が見つからない。」
という、なかばあきらめ気味の声も聞くことになりました。

なぜ障がいを持っていることで「結婚」やパートナーを見つける事をあきらめないといけないのか。

私たちは、彼らの「夢」を「夢」で終わらせないために、また、自立した生活を有意義に送っていただけるように、支援したいと思っています。

就労支援事業所を運営しながら、いきいきと働く場を提供し、そして「縁結び」をもたらすイベントの運営やマッチングのお手伝いをしていきたい…

私たち「NPO法人 えんむすび」は、「地域に笑顔の花を咲かせよう！働く喜びを分かち合い、充実した日々を過ごすために。」

を理念にかかげ、就労支援事業所を運営する者、結婚相談所を運営する者などが力を合わせて、これまで培ってきた経験を最大限に活かしながら、障がいを持った方々にも、出会いと結婚を成就させたい、そして生活の安定をも支援していきたい、という思いで活動してまいります。

そして、このような活動を行うにあたり、広く地域の皆さまにご理解をいただき、社会的な信用を得て、幅広い方々に、私たちの「社会と人」の、「人と人」の、「縁を結ぶ」活動を知っていただきたい、そう願って活動を展開しています。

(平子 将之)



おさがり交換会わらしべ



「子育てをもっと楽しもう！」

子どもを産むまでは、服がこんなにあつという間に着られなくなるとは思いもしなくて、10か月かけておなかで育った小さな命は、ふわふわとして頼りなげなその存在は、この世界に生れ落ちて、どんな、スクスクと育っていく。

いっぱい食べて、いっぱい笑って、すやすやと眠り、スクスクと育っていく。

お気に入りの服だからまだ着たかったのに、とさみしそうな娘の様子を見ていると、着れなくなつたからといって、すぐに処分してしまうのとはばかられる。

「また誰かに着てもらおうか？」

なかなか眠れない夜を過ごし、何回も何回も読んだ絵本。もう添い寝も必要なくて、自分で絵本も読めるようになったから、誰かに読んでもらおう。

おきにいらだつたおもちゃも、遊ばなくなつて、おもちゃ箱の中でさみしそう。遊んでくれる誰かのところへ届くといね。

同性のことがいれば洋服のおさがりをとっておくこともできるけれど、あいにく我が家は男女それぞれ一人ずつさずかつたので、上の子も下の子もそれぞれに服やおもちゃが必要に。

近所のお付き合いも希薄な昨今、お気に入りだったお洋服、楽しい思い出の詰まったおもちゃ、毎晩読んだあの絵本。だれかにまた使ってもらう、あなたのお気

に入りがまた誰かのお気に入りになる。ちょっとした思いでつながれたら。イベント活動は7年を超え、たくさんの方ファミリーにご利用をいただきました。

「おさがり交換会わらしべ」は地域をつなぐ、子育て世代の思いをつなぎます。

子育てをもっと楽しめるように、孤立した孤育てにならないために、名古屋市内を中心に毎月イベントを開催しています。

物に溢れ、欲しいものはすぐに手に入る世の中で、大事に、大切にすることをくんでいくためにも。

おさがり交換会わらしべが大切にしているのは、ただの物の交換ではなく、思いの交換です。

活動を支援してくださる人、おさがりの寄付をしたい方も募集しています。大量に消費したり、大量に廃棄したりするそんな時代、私たちはいま物との付き合い方にいまいちどキチンと向き合わなくてはいけないステージになっているのではなかと考えるのです。

これからご自身の地域で活動をしたい方の支援、相談も大歓迎です。できることから、できる人が始めるちょっとしたアクションで未来を私たちが創っていきましよう。

(稲吉 由香)

NPO法人風の会

「私の進みたい地図を
作ってくれた」

2021年が始まり、新施設の建設現場を見ながら、利用者と職員でもうすぐ始まる新生活の話をするのが日常となっていたある日。突然の計報。

自分の気持ちの整理がつかないままご自宅へお邪魔した。挨拶しても吉宏さんの返事が無い。吉宏さんが常にいたベッドがない。はじめて『感謝の：』『チュー』を聞くことなく、玄関のドアを閉めた。

重症心身障がい者施設「NPO法人風の会」。2021年春、みんなの念願だった新施設が完成。利用者やご家族から要望の多かった「ショート



ステイ」事業を開始。仲間たちと過ごす日中生活介護「ふきのとう」と、職員が利用者宅へお邪魔する「ホームヘルプサービス」とをあわせて新たな第一歩を歩み出した。私にとって「ホームヘルプサービス」は毎回が学びや反省の場。中でも三田吉宏さんとの出会いは、自分の今後を真剣に考え行動する力を与えてくれたとても大きな存在。吉宏さんは、筋ジストロフィーという病気により人工呼吸器を使われている。お母さんは風の会の副理事長でもあり、給食も担当。利用者や職員の為に日々働いてくれている。吉宏さんは、昼間はお父さんと過ごされている。

水曜日と日曜日には職員がご自宅へ。医師にも驚かれるらしいが、吉宏さんは呼吸器を使っているも会話ができる。「こんにちは」「誰?」「来栖さん」。これが私との毎回の挨拶。そこからは髭剃り・足浴や体操など盛り沢山。平日はお父さんに痰吸引をお願いしながらお母さんの「ただいま」まで過ごす。お母さんの『感謝の：』に続いて吉宏さんの『チュー』で終了。日曜日にはお母さんと職員で清拭や着替えなど更に盛り沢山。

そんな日曜日に三田家にお邪魔するのが私はとても好き。『おはようございます』お父さんがソファから立ち上がり『よっちゃん。来栖さんがみえたからお父さんちよと出かけるね』『いい!』ほんの数時間だが、お父さんはご自身の時間を過ごされる。お邪魔する事を喜んでもらっているのかと嬉しかった。「ふきのとう」への通所がなかなか叶わなかった吉宏さん。作品作りは苦手だと先輩職員から聞いていたが、なにか楽しみを：の思いから開始。最初、作品作りを一緒にするのは自分だけだったが『次は何にします?』『これやりたいんですけど』職員の輪が大きくなり、1回だけから数回で仕上げる

作品へ。2019年には「ふきのとう」で制作するのと同じ壁画を作るまじになった。最初は全くやる気のないだった吉宏さん。毎回「今日はこれ!」と続けると「来栖さん。絵書く」が挨拶に。私は心の中でガッツポーズ。数回準備が間に合わず、持ち込み無しの日には吉宏さん是不機嫌で会話が少ない。隣にいる私は、続ける事の意味や本人の意識の変化を感じられて笑顔で上機嫌。

自分が三田家の皆さんに出来る事は何かを真剣に考え喀痰吸引の資格も取得はした。だが新型コロナウイルス感染症防止についてご家族と話し合った末「ホームヘルプサービス」は中止に。更にご本人の長期入院：。今年一月、吉宏さんはいつでも皆を見守ることが出来る場所へ旅立った。

私に仕事の楽しさや難しさを教えてくれ進むべき道を示してくれた吉宏さん。

はじめてだね。私からいっぱいいっぱい。いつばあゝい

『感謝の：』『チュー』
(来栖 千夏)

NPO法人名古屋おやこセンター



「子育て支援員になって」

私の子育ての始まりは十数年前、まだ「公園デビュー」という言葉の残る頃でした。

とにかく友達(ママ友)が欲しければ公園に行きましょつ、という時代です。

私はというと、子どもに慣れておらず、初めての子育ては不安しがなく、それまで社会の一員であったはずの自分が突然社会から切り離されたように感じ孤独でした。急に子どものことならなんでも分かる母親にはなれませんが、話の通じない、しかも自分の不注意で簡単に死んでしまう我が子と長い時間ふたりきりのプレッシャー、かといって自分の思うように家

事も育児も進まず不安な日々でした。

そんな中「子育て広場」と呼ばれる場所を利用することがありました。「地域子育て支援拠点」の前身にあたり、利用料を支払って利用する乳幼児と保護者のための遊び場でした。たびたび通ううちにスタッフとも話すようになり、ある日ひとつの質問をされました。

「いい子って何だと思っつ？」
私は少し考えて「親の言うことをきく子」と答えました。

そのスタッフの方はうん本当にそうかな、という感じでした。
「私は自立した子かな、と思っつ。自分のことは自分でできる子」

そのとき目からウロコが落ちました。自分がコントロールしようとしていた子どもたちが思い通りにいかず不満、不安を感じ、子どもがちゃんとしていないと自分がかんとしていないと思われたいと思っつていました。完璧な人間などいないのに、完璧を目指してへとへとで母親の仕事だと思っつていたので、子どもの評価が母親の評価だと思っつていました。本来育児は夫婦や環境やいろんな影響を受けるもので、母親だけでどうにかなるものでもありません。今は「ワンオペ育児」という、ひとりでの子育てを担うという意味の言葉がありますが、ワンオペ育児は決して子育てのスタンダードであるべきではないと思っつます。突然「親」と呼ばれるのは父も母も同じですから。助け合わないと。

結局私は自分が「大人の言うことを聞くいい

子」を育てている「しつげのできるいい親」に見られたい！と頑張っつていたのでした。

子どもが褒められれば親は自分が褒められたようにうれしいものです。でも、いつでもどこでも誰にでも褒められるいい子などないのです。

なに私は子どもたちの思いを聞くことなく、自分の思っつように子どもをコントロールしよう、もがいていました。そりや疲れますね。いい親でもないです。

そのことに気っついても自分を変えるのはなかなか難しく、未だに子どもを自分の思っつようにコントロールしようとしてしまっつことがあります。子どもには子どもの思があるのに。

その後、広場のスタッフに声をかけてもらい、自分がスタッフとなって活動することになったのです。

ありがたいことに私は三児の母になっていました。ひとり目であんなに悩んだ子育ても、家族や家族以外の方たちと助け合える環境のおかげで乗り越えることができたのです。そして、子育て支援のお手伝いを始めて、子育て支援員として活動することになりました。

私は現在、名古屋市中区にある「名古屋子育て支援拠点 おやこセンター」で子育て支援員として活動しています。

子育て支援員とは、名古屋市や愛知県の実施する研修を受講すればどなたでもなれるものです。私は子育てを支援するサポーターのようなものだと思っつています。

初めての子育てに戸惑い、悩みながら子どもの成長を楽しむ利用者さんと出会う中で、当

時の自分を振り返り、日々反省し、利用者さんから教わることも本当にたくさんあります。

最近の子育ては私の頃とは違っつて、ネットでいろいろな情報得られて便利な反面情報の取捨選択が難しく、何を信じたらいいのかわからなくなっつている方が多いと感っつます。「コナ禍」にあっつて、人と直接かかわる機会が減っつて戸惑っつているのはママたちも同じです。自分のことは常に後回し、子どもや家族を優先して必死な時にスマホの中の世界は眩しすぎると思います。

今のママたちは本当にいろんなことをよく知っつている方が多く、知識は豊富です。でも、悩みは昔とあまり変わらないような、知識があっつても子育ての知恵はどうなのか、むしろコナ禍にあっつて、なにが赤ちゃんの当たり前なのか、他の赤ちゃんはどうなのか、分かりにくくなっつてしまっつた感っつがします。

時折、当時の自分のような利用者さんに出会うこともあります。そんな時は当時の自分が言っつてもらっつてうれしかっつた言葉をかけるようにしています。

「今のままで十分がんばっつているよ、遊びに来てくれればありがたう。」

人とつながらること心で軽くなる感っつがあります。人とつながらること先を見通し、不安が和らぐ感っつがあります。

「あなたはひとりぼっちじゃない」
私が教えてもらい、子どもたちにもママやパパにも伝えたい言葉です。

(清水 麻樹)



NPO法人名古屋ベトナムネット



「ベトナムにはまって日本語を教える」

●こわかった初めてのベトナム

私が初めてベトナムに行ったのは、今から12年前の2009年です。最初は、日本と全く違う現地の賑やかな風景に圧倒されました。夕食を真っ暗な路上の小さな店で食べたのですが、実は暗くてこわくて、死んでしまう気がしました。

しかし次の日の朝、また路上の店で、できたてのフォー(ベトナムのきしめん)を食べると、そのうまさに生き返って、「これからずっとフォーを注文して食べていくぞ」と思いました。

●日本に戻って日本語の先生へ

日本に戻ってから、私はベトナム語を勉強しつつ、増えてきたベトナム人に日本語を教えていると、ベトナム人はどんどん増えて、日本語を教える人数も増えました。私は日本語教育能力の試験を受け、日本語教師の資格を取り、本職の日本語の先生になってしまいました。

●元気なベトナム人

今では、毎週末、ベトナム人たちにボランティアで日本語を教えます。8年前に、入門レベルで、「もらいます」「あげます」と、勉強していたベトナム人たちは、今では日本語がうまくなり、「気配りと思いやりはどう違うか？」などと、難しい質問をしてくれます。

私はといえば、ベトナム人たちに、フォーに限らず、「ブンジエウ(トマトスープ麺)」や「ブンボーフエ(ピリ辛麺)」を食べさせてもらい、胃袋をがっつりつかまれています。

●コロナと食料配布

ところで2019年末から、コロナの影響でいろいろ大変なことが起きてきました。ベトナム人たちは帰国ができず、仕事や住まいがなくなってしまう者もいました。留学生はアルバイトが減ったり、留学生自身が病気になるなど困ったことが起きてきました。さらに、日本語教室自体が、会場の閉鎖でできなかつたり、オンラインにせざるを得なかつたり、苦しい状況になってきました。

それで寄付を集めてささやかですが食料を配ったり、赤字になってもいいので日本語教室を再開したり、できることを少しずつやっている今日この頃です。

(荒川 孝之)



コロナで困っている人に配った食料

なごや防災ボラネット



「名古屋の災害発生時に、ひとりでも多く、一日も早く、日常生活が取り戻せるように」

日本各地で毎年、地震や水害が発生しています。

名古屋でも地震や水害など、災害が発生した時に、被災者さん向けに、災害ボランティアとして活動していただく方へ

- ・災害ボランティアを募集したい
- ・被災者と災害ボランティアをつなぐ、「災害ボランティアセンター（ボラセン）」を多くの方に知らせたい
- ・われわれ、災害ボランティアコーディネーター（被災者と災害ボランティアの仲人役）の仲間を増やしたいです。



わたしも普段は名古屋市民として、いざというときのために、災害や防災、減災について、勉強をしています。

名古屋市で災害にあった時、ひとりでも多くの方を救いたいという思いで、災害ボランティア活動や防災啓発活動を、乳幼児や未就学児、小中高校大学、障がいのある方やスタッフさん、高齢者福祉施設さん向けなどにしています。

次のような方に、我々のことをお伝えしたいです。

- ・防災、災害ボランティアに興味のある方
- ・災害発生時に、災害ボランティアとして協力したい方
- ・被災者と災害ボランティアをつなぐ、「仲人役」になりたい方
- ・地域の災害時の早期の復旧、復興を願い、活動したい方

興味のある方、いっしょに活動しましょう！

（浅野環）





NPO法人 囊胞性線維症支援ネットワーク

のうほうせいせんいしょう

「囊胞性線維症を早期に診断して治療を始めるために」

囊胞性線維症は、出生直後に腸閉塞を起し、乳児期に膵臓が萎縮して栄養不良をきたし、幼児期から肺炎を繰り返すようになる難病です。囊胞性線維症は、ヨーロッパ人種には多い(出生約3000人に1人)ですが、東アジアでは稀であり、日本での頻度は出生約60万人に1人のめずらしい病気です。



これまで、囊胞性線維症の全国疫学調査に関わり、遺伝子診断と機能診断(汗試験、便中膵酵素)を担当して、2012年からは患者登録制度の事務局をするようになりました。

その中で、患者さんの数は少ないものの、主治医の協力によるデータの蓄積により、原因となる遺伝子変異が日本とヨーロッパ



パでは全く異なることがわかり、日本の囊胞性線維症の特徴も分かってきました。これらの情報のもと日本における診断基準や治療方針ができました。しかしながら非常に稀な病気であるため、これらの情報は広く認知されていません。

NPOの活動を通して囊胞性線維症とはどんな病気かを一般市民に知ってもらい、日本における患者さんの現状や治療について医療関係者にも知ってもらおうように、周知活動を始め、情報交換会という会で医療関係者および囊胞性線維症について知りたい方に向けて治療方針や患者さんの経過などの情報を発信しています。

しかしながら、いまだ多くの課題があり(①~④)、これを解決することが将来にわたって安定した診断と治療を提供するために必要です。

- ① 確定診断のための汗試験を実施できる施設が国内にひとつしかないため移動に時間と費用がかかる、
 - ② 診断に必要な検査(遺伝子診断、汗試験、便中膵酵素)がいずれも保険収載されていない、
 - ③ 診断に要する費用が研究費で賄われている、
 - ④ 患者さんとご家族、主治医を含む医療関係者がアクセスできる情報が限られている、
- といった課題を解決することが、将来に

わたって安定した診断と治療を提供するために必要です。

私たちのNPOはこれらの問題を解決するために設立したのですが、寄付集めに大変苦労しています。そのような中でも、今年度から受け持ち患者の治療法についてオンラインでカンファレンスを行ったり、患者の子どもさんへの提案をしたり、患者の子どもさんを持つ海外の夫婦が日本で仕事を見つけたらというオンライン相談にのったり、といった活動をしています。

このように困っている方が気軽に相談する窓口としてNPOが存在します。先生方も診断に迷うときには事務局に連絡をいただき、必要な検査を実施し、すぐ必要な治療の提案をして、病状の維持ができています。また、患者さんの親御さんに普段の食事の様子や生活などを聞いて、その患者さんにあつたレシピや食品の選び方を提案しました。それを聞いた患者さん自身も自分にとって必要なものを選択できるようになり、食べることに積極的になり、これからの生活で何に気をつけたら良いかわかって本当に良かったとおっしゃっていました。

どんな形であっても希望をもって治療し前向きに生きていくことを支援できればという思いでこの活動を続けています。
(小澤 祐加、石黒 洋)

ハーレーサンタCLUB NAGOYA



子どもたちの笑顔で
あふれる世の中になるように...



「児童虐待」をなくしたい!!

増え続ける「児童虐待」。

かわいそうに...と、他人事の人たち。

子どもは親を選んで生まれて来ることができません。

日本にも、こんなに愛情を注いでもらえない子どもがたくさんいるっていうのが許し難かったし、この問題を何とかしたいなと思いました。

児童虐待の講演会やシンポジウムなどに行ってみました。

そうすると、現役をリタイアした高齢の方だったり、ある程度生活に余裕のある方が来場者の中心で、会場には若い方が全くいないことに気づきました。

もっと幅広い世代にアピールしなきゃいけない!!

これから結婚する若者や、結婚して子育てしている若い親、すぐに手を上げてしまいそうな人にも知ってもらう必要があると思ったのです。

皆さんは「オレンジリボン」を知っていますか？

オレンジリボン運動は、「子ども虐待のない社会の実現」を目指す市民運動のシンボルマークで、子どもたちの明るい未来を表しています。

まずはオレンジリボンを知ってもらうことが大切だと思いました。

そこで、オートバイを使うことを思いつきました。重く堅く取り組むのではなく、面白そうだから...とやって来てもらい、知ってもらうのも、有りだと思ったのです。

『ハーレーサンタCLUB NAGOYA』を立ち上げました。

オレンジリボンを啓発するのに、普通にチラシやティッシュを配るんじゃなくて、いろいろなイベントにブースを出して、オートバイが並んでいるけれど何だろう?と思つて来てもらい、知ってもらえるといいな...と思いました。

初めはオレンジ色のオートバイをイベントに並べさせてもらい、啓発することから始めましたが、どうしてもオレンジ色のバイクは台数が限られてきます。

そこで、子どもたちがみんな大好きなサンタクロースを思い出しました。その代わりにバイクにまたがったサンタクロースが、クリスマスの時期にたくさん集まったら目を引くだろう?

そして、みんなが集まった場所で被虐待経験のある若者に話をしてもらったら、みんなの心に響くだろう...。

思った通り、涙をにじませている参加者もいます。

「絶対そんなこと許せん!」と怒っている参加者もいます。

バイク乗りは、単純だけど熱い人が多いのです。

「知れば感じる、感じたら動く、動いたら変わる」という手応えというか、確信をしました。

役所や行政ができない永遠の課題「いかに話を聞かせたい人に届けるか」という課題をクリアできたのです。

児童虐待の防止のためには、「虐待を見つけたら通報をしよう」ということや、子育てに疲れても相談できる人や場所があるってコトを少しでも多くの人に知ってもらうことが大切です。

そして、知らなかった人が知って、今度は、その知った人が知らない人に伝えていく!

これからも、クリスマスの時期だけではなく、人がたくさん集まるイベントとコラボして、一人でも多くの人に知ってもらい、悲惨な事件を少しでもなくしていけたらいいな...と思っています。

子どもたちの笑顔であふれる世の中になるように...
(冨田 正美)

NPO法人ボラみみより情報局

「〇〇のある生活」

「〇〇は恋愛に似ている」と言う人がいる。ともに自発的な無償の行動で、自分で対象を選べる。「好き」かどうかが重要な基準となる。自分だけが満足するだけではうまくいかない。心移りすることもあれば、離れるとき、別れるときは辛く難しい。

さて、〇〇に何が入ると思いますか？

〇〇活動をしていなくても生活は続くけど、活動があると生活にメリハリができる。相手が喜んでくれると自分もうれしくなって、少しだけ毎日が豊かになったよいう気がする。さらに〇〇の場合、自分の小さな活動が少しでも社会や環境の役に立っていると感じられると、やりがいも喜びも大きくなる。

そう、答えは…「ボランティア」。

共感してくれる人も多いのでは？

もちろん、うまくいかないことやしんどいこともたくさんあるけど、はまってしまくと、なかなか抜け出せなくなるところも恋愛に似ているのかもしれない。

私も、ボランティア活動にはまってしまっただひとり。

今継続中のボランティア活動を見つけたきっかけは、ボランティアのフリーペーパー『ボラみみ』。いつも行くスーパーで時々見えていた雑誌。表紙のイラストがかわいいし、手に取りやすいサイズで、時々読んでいた。「フィリピン人の子どもたちの先生を募集しています」というタイトルを見つけ、緊張しながら電話をかけ、面接を受け…気がつけば、もう一九年目。

そして今は、縁あって『ボラみみ』をつくる側になった。

ボラみみの活動も、たくさんの方のボランティアスタッフに支えられている。毎号二万部発行される『ボラみみ』の編集も発送配達も、日々の事務作業や会計も、ボランティアの皆さんができる時間にできることを分担してくださっている。

「こんにちは。二ヶ月ぶりだね」「お休みは、どう過ごしましたか？」「久しぶりに作業に来られてうれしいな」…作業日になると、ボランティアの皆さんが事務所に集まり、みんな手と口を動かす。そんな事務所でのやり取りを楽しみに参加してくれている人も多い。

ボランティアに参加する理由は人それぞれ。でも、私がここで出会う皆さんはともいきいきとしている。

これからも私は、皆さんと一緒に『ボラみみ』をつくっていききたいと思う。

私が『ボラみみ』でライフワークだと思えるボランティア活動に出会ったように、自分ができる、やりたいと思える活動に出会う人がひとりでも増えることを願いながら。そして、これを読んだあなたが、ちょっとでも『ボランティア』に興味を持ってくれるとうれしいな。

(さほらえこ)



NPO法人瑞穂学習支援会

「子どもの居場所を 作り続ける」

理事長筒井孝治、元は中卒、土木作業員としていくつかの建設会社で計6年勤務。結婚を望んでも、中卒であることを理由に結婚を断られ、仕事も満足に選べなかった。

私、副理事松井裕輝、元は20回も転職を繰り返した。発達障害であるADHDの



特性もあり、教育の仕事以外では1年続いた仕事はひとつもない。

「普通の社会人」からは、およそかけ離れた二人は、前職の通信制高校で出会った。多くの生徒たちと関わりが楽しくて仕方なかった。もちろん楽しいことばかりではない。当時から受け入れていた生徒

達は、いわゆる「不良」「ひきこもり」と言われ、他の学校では手がつけられないと言われた子が多かった。けれど、じっくりと人として向き合っていくなかで、少しずつ彼らもこれからの生き方を見つめ直して行くことができることを、生徒たちから教わった。

そんなある時のことだった。前職の社長が会議で言った。

「学費が払えない子どもたちの受け入れは、もうやめましょう」
「手間のかかる生徒は引き受けるべきではない」

二人が関わっていた生徒たちの中には、家庭環境が複雑な子も多く、支払いが滞っていることも少なくなかった。そして手間のかかる生徒も多い。通信制高校事業は収益事業として運営しているのに、収益が回収できないモデルとなりつつあったのである。それを回避しようとするのは経営判断として、非常に適切な方針だった。ボランティアではないのだから。

けれど、筒井と私の考えは違った。
「親が学費を払えないから、子供達が学ぶ機会を失ってしまうのでは、貧困の連鎖は止まらない。そもそも子供達には何の罪もない」

もしも学校から拒絶されてしまったら、今いる子達はどうなるのだろうか。筒井も私も共に、社会から拒絶される恐怖を知っている。だからこそ、目の前にいる生徒たちの居場所を守りたい。

その一心で、瑞穂学習支援会を設立した。最初は思っていた以上に辛かった。他の仕事とかけもちし、団体を維持し続け、生徒と関わり続けた。

それから4年の月日が経ち、多くの生徒が巣立っていった。日々の授業で、そして卒業式で見せてくれる生徒達の笑顔、言葉。私達の行動は間違っていなかったと教えてくれる。卒業した生徒が遊びに来てくれるのも嬉しい瞬間だ。中には卒業した後、職員として関わってくれる子もいる。現在は無料の学習支援や、居場所としての機能が強い子ども食堂も始めた。

瑞穂学習支援会は、これからも生徒や卒業生とともに歩み続ける学校でありたい。
(筒井孝治、松井裕輝)



● 令和3年度なごや NPO 応援事業 参加 NPO

《保健・医療・福祉》

● 認定 NPO 法人あいち骨髄（こつずい）バンクを支援する会
骨髄バンクの支援・普及啓発活動、白血病患者・家族の闘病、
こころの支援等を行っています。

<http://aichinokai.or.jp>

● NPO 法人あなたの声

失語症になられた方の社会参加の支援をしています。

<http://anatanokoe.sakura.ne.jp>

● NPO 法人えんむすび

障害の有無に関わらず、誰もがより豊かに生活できるよう、
就労、結婚相談等の支援をしています。

email: enmusubi758@gmail.com

● NPO 法人風の会

重度心身障がい者があたり前に暮らすための、
自立生活支援をしています。

<https://kazenokai.jimdosite.com/>

● NPO 法人

嚢胞性線維症（のうほうせいせんいしょう）支援ネットワーク

難病「嚢胞性線維症」患者の支援及び早期の
診断と治療のできる環境づくりをしています。

<https://www.cfnetworkjapan.org>

《まちづくり》

● NPO 法人愛知グリーンサポート

樹木医の指導で緑地、お庭などを整備し、
美しい快適な生活環境づくりの活動をしています。

<https://aichigreensupport.meisho-hp.jp>

《環境保全》

● NPO 法人イカオ・アコ

フィリピンでマングローブ植林を行い、

Co2 削減・気候変動の抑止に取り組んでいます。

<http://ikawako.com>

《災害救援》

● なごや防災ボラネット

名古屋が災害に強い都市になるよう、災害ボランティア団体などが
協働して防災、災害時に備える活動をしています。

<https://nagoyabousaiboranet.wordpress.com/>

《国際協力》

● 認定 NPO 法人アイキャン

世界中の子ども達が平和な社会で暮らせるように、教育や保健、
平和構築の活動を行っています。

<https://ican.or.jp/>

● NPO 法人名古屋ベトナムネット

ベトナム人などアジアの人と日本人がそれぞれの文化を紹介しあい、
助け合う活動をしています。

<https://www.758vietnam.net/>

《子どもの健全育成》

● NPO 法人アスクネット

学校とまち、子どもと大人をつなぐ教育コーディネーターをしています。

<http://www.asknet.org/>

● おさがり交換会わらしべ

孤立しやすい子育て世代に寄り添い、子育ての悩みや問題の改善や
知識、技術の提供をしています。

<https://warashibeosagari.crayonsite.net/>

● NPO 法人名古屋おやこセンター

子どもの笑顔あふれる社会を目指して、子どもを対象にした活動、
子育て支援の活動をしています。

<https://www.oyakocenter.nagoya/>

● ハーレーサンタ CLUB NAGOYA

子どもの虐待を防止するため、シンボルマーク「オレンジリボン」の
普及啓発をしています。

<https://harley-santa-club758.crayonsite.com/>

● NPO 法人瑞穂学習支援会

子どもを含む若年層の学業や生活にかかる問題の改善に
取り組んでいます。

<http://yoyogi-gifu.jimdo.com>

《NPO 支援》

● NPO 法人ボラみみより情報局

人・モノ・情報を、それを必要としている団体・施設につなぎ、
社会問題の解決に取り組む活動を応援しています。

<http://www.boramimi.com/>

お問い合わせ先

名古屋市市民活動推進センター

〒460-0008 中区栄 3-18-1 ナディアパーク 6 階

TEL : (052) 228-8039 FAX : (052) 228-8073

email : npo@sportsshimin.city.nagoya.lg.jp

URL : <http://www.n-vnpo.city.nagoya.jp/>



センター公式 Facebook も更新中！

<https://www.facebook.com/vnpo758>



主催：名古屋市（スポーツ市民局市民活動推進センター）

協力：RACCOLABO Earth.

発行：令和3年10月